

志を言うこころをい
(藤田東湖ふじたとうこ)

俯ふしては 郷国きょうこくを 思い 仰あおいでは 君きみを 思おもう

日夜にちや 憂愁ゆうしゆう 南北なんぼくに 分わかる

惟ただ 喜よろこぶ 閑来かんらい 典籍てんせきに 耽ふけるを

錦衣きんい 玉食ぎよくしよく 本もと 浮雲ふうん

俯思郷國仰思君 日夜憂愁南北分
惟喜閑來耽典籍 錦衣玉食本浮雲

解説 東湖の幽囚時代の作。多忙な政治生活から離れ、読書三昧する心静かな楽しみを述べた詩。

語釈 ※言志||自分の心のうちを述べること。※術仰||あるときには。またあるときにはほどの意。※郷国||この場合は水戸。※君||斉昭公。※日夜||日も夜も絶え間なく。※南北分||南は江戸の君公、北は水戸の同志。※閑来||暇。※典籍||書物。※錦衣玉食||美麗な衣服と贅沢な食物。※本||本来。※浮雲||空に浮かぶ雲があるかわからないように漠然として関心がないのに例えた。

通釈 自分は幽居の身である。こうした境遇に置かれてこそ人は一層君国が案じられ、主君、故郷の同志の事が思われる。自分と同じ幽閉の身の上の主君は、今どのような心境でおられるであろうか、主のない水戸の城下の人の心は今いかがであろうか。昼夜となく憂いは増し心は傷む。こんな焦燥と不安の中に過ぐす日々にも一つの楽しみはある。それは多忙な政務とは異なり、時間が有り本が読める事である。読書の楽しみは何物にもかえがたく、贅沢は、空に浮かぶ雲のように、とりとめがなくなんら心を動かすに足らないことを痛感するのである。